

<論文（キャリア形成論）>

進路選択における潜在意識の研究： 大学生の自由記述回答の分析

中 崙 剛

要旨

本研究は、近い将来、就職活動を控える学生の心理状態に注目し、キャリア教育（キャリア形成支援）を通じて顕在化する潜在意識が、彼らのキャリア形成にとってどのような役割を果たし得るのかを、複数大学（4年制大学、女子大学）の学生の自由記述回答データを用いたテキストマイニング手法により探ったものである。

厳しい新卒採用状況下、先行き不透明かつ不安感に満ちた学生心理に立脚した計量テキスト分析により、教育現場において、いかなる潜在意識への働きかけが学生の主体的行動にとって重要となるかを明らかにした。こうした結果は、「行動してからようやく物事を理解する」という体験学習が人生を切り拓くヒントになり得ると同時に、潜在意識の有効活用が自己のキャリア形成に寄与することを論じたものである。

キーワード

潜在意識 subconscious、キャリア形成 career formation、テキストマイニングtext mining、とりあえず志向 for the time being orientation (FTBO)

1. 本研究の目的

2011年度より文部科学省の大学・短期大学設置基準改正として大学・短大における職業指導（キャリア・ガイダンス）が制度化された。2012年6月にとりまとめられた「若年雇用戦略」では初年次から教育活動の全体を通じて体系的・系統的なキャリア教育を実施する取組みを進めることが方針に示され、大学等

高等教育機関のキャリア教育の現場におけるキャリア形成支援が強化されつつある。こうした中で、学生達は将来の生き方やキャリアについて自己と対峙する機会が確実に増えたといわれるが、その支援方法は各校によって千差万別である¹⁾。

一方、2013年卒採用から適用された倫理憲章改定（日本経済団体連合会）による採用広報期間の短期化は、準備や思慮等が不十分な学生に意思決定を強いる状況をもたらしているとされ、主体性や計画性の面から指摘される課題は少なくない（日本経済新聞社2012）。学生の立場からすれば、情報過多の状況下で一部の業界や企業に絞ってエントリーする行為には、情報選択における“注意（スクリーニングした上での選択）”が必須となる。すなわち、学生の意思決定における「意識の選択性²⁾」という概念が重要であると認識できる。日本経済新聞社（2013）による「優秀な学生と準備不足の学生の二極化が顕著」という報告や昨今の若年労働市場における「七・五・三」に代表される早期の離職率は、こうした意識の選択性による影響度の大きさを物語っているからである。通常、認知心理学の意識研究では、選択されなかった情報は全く意味がなく捨象された情報ではなく、実はかなりの意味を持つと考えられる（増井2003）。近年では、学習・記憶現象の切り口として検討している研究として、水原・松見（1994）・山田（2005）の他に、河井・溝上（2011）や溝上（2012）は、将来展望を日常生活と接続させることが現実的な将来展望に繋がる点を学習時間や学習動機から説明する。しかし、これらの分析は事柄や事象の側面などの一般論の検討に留まっている。つまり、キャリア教育の重要な対象である非接続意識を持つ者（現実的な将来展望を持ってない者）まで捉え切れているとはいえない。

そもそも、こうした「潜在意識」と「行動」との密接な関連については曖昧かつ不明確である故、研究対象にはなりにくく、キャリア形成分野でも明示的に扱った研究が少なかったのではないだろうか。近年、地方公務員の入職行動を「とりあえず志向」という視座から実証した中畠（2013）では、「時間順序

の選択性³⁾」という時間的要素を抽出し、職業志向性としての潜在意識が初期キャリア形成に正の影響をもたらす可能性が明かされつつあるが、量的研究のみならず、質的なアプローチによる研究の余地があった。

そこで、本稿は、曖昧かつ優柔不断な昨今の学生の心理状態に着目し、キャリア教育支援のなかで顕在化する潜在意識が、彼らのキャリア形成にとってどのような役割を果たし得るのかに着目する。複数大学（4年制大学、および、女子大学）における学生の自由記述回答を用いて不鮮明であった若者の内面を捉え、その特徴を明確にすることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。次節では、無意識・潜在意識に関する先行研究、および、研究方法を論じる。3では、とりえず志向という潜在意識と行動の関係性についてテキストマイニング手法による分析結果を述べる。最後に、4では、結果の要約と今後の研究課題を言及する。

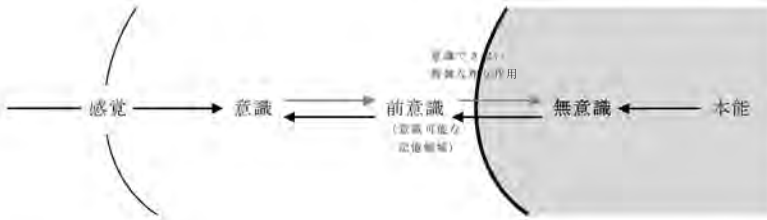
2. 先行研究と研究方法

I. 先行研究

a) 無意識の心理学研究

精神分析学の始祖フロイトの考えた心理学モデルによれば、「人の意識の背後で、人の心が意識できない領域があり、その意識できないメカニズムが心理を支配する」とされる（図1の網掛け）。実際、我々の行動には、過去の経験や記憶に引きずられる面があるが、フロイトによれば無意識の部分は基本的に動物であり「常に快につながる行動を求め、不快を避ける（＝快感原則）」に従うという。すなわち、逐一過去の経験を参照しながらのものではなく、無意識や潜在意識により物事を効率良く合理的に処理するメカニズムになっていることを強調する研究がある（モース2006：川口2003）。人の心は不安や欲望を抑圧できるよう無意識にコントロールされるとフロイトの指摘を捉えた場合、本稿のいう潜在意識もそのモデルを追従することになる。

図1 無意識のモデル

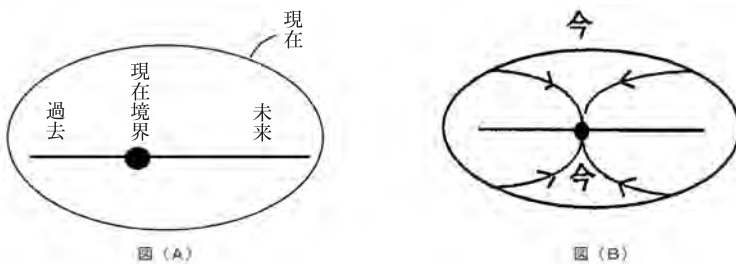


出所：http://www.page.sannet.ne.jp/takakok/pages/7MASTER.htm

b) 時間学の研究

一方、哲学分野の入不二（2000）は、過去とは「想起」という仕方での現在経験であるし、未来とは「期待」という仕方での現在経験であり、過去と未来の時間順序は現在の思考経験の中で行われるという。すなわち、「過去→現在→未来」が横一直線に並ぶのではなく、現在があって初めて、その中に過去も未来も成立し得ると解する（図2-(A) 参照）。また、入不二（2000）は、図2-(B) を用いて、高次（メタレベル）の“今”が局所的な低次（オブジェクトレベル）の“今”へと、それ自身の中で、縮退し続ける反復こそが時間性のコアと捉える。

図2 時間学基礎論に基づく過去/現在/未来

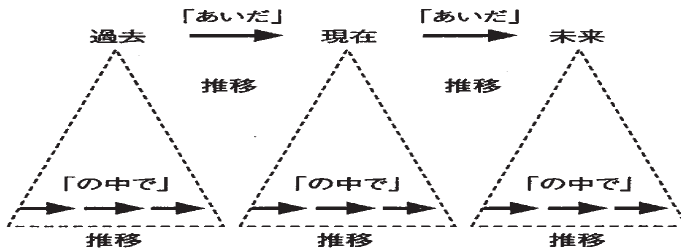


出所：入不二（2000,pp.10-11）。

加えて、入不二（2002）は時間的变化を3区分の時制表現（過去/現在/未来）で表す際、“二つのあいだ”が同時発生すると指摘する。図3のように、未来と現在の「あいだ」、現在と過去の「あいだ」であり、この「あいだ」でこそ、

時間は推移すると考える。さらに、時制的な3区分の「あいだ」だけでなく、3項それぞれの「中」(=図3の点線の三角部分)においても時間の推移が生じている。つまり、この3つの時制表現(なりつつあった・なりつつある・なりつつあるだろう)から、「なる」という推移を分離独立させることは不可能であり、時制表現(区分)を超えて推移は遍く浸透し続けると解される。要するに、過去/現在/未来の区分は時制的なものの極限と位置付けられるのである。すなわち、ここでの解釈からは、時間学(b)と心理学(a)は不可分な関係にあり、その両者を総合する視点が人間の主観と客観的視点から捉える際に、肝要であることが示唆される。

図3 「なる」という推移



出所：入不二 (2002,p.250)。

c) 「とりあえず」の研究

ところで、昨今の若者達は将来に夢や希望を持ってなくなっていると指摘され(山田2004)、将来を悲観的に把握した研究が少なくない。しかし現実問題として、若者の就業に対する意思をどう捉え、いかに分析できるであろうか。こうした若者の漠然とした潜在意識の典型例として、「とりあえず」志向について最初に着目した中嶋(2009;2013)では、前述の入不二(2002)や言語学分野の長塚(2000)の時間副詞としての定義を踏まえ、大きく解釈が異なる2側面から職業志向性としての「とりあえず」志向が初期キャリア形成に有意な影響を与えることを実証している(表1)⁴⁾。第1の「時間選好性」は少しでも早く安定した職業に就いて不安から解放されたいという意味合いになり、第2の「時間順序の選択

性」では将来の変化（離転職）の可能性を残しながらも一時的に就業可能な職業に身を置くという意味合いになる。以下、この視点を援用しつつ、就職や就業に対する不安かつ曖昧な感情を抱く学生の心理状態を実証的に捉え直す。

表1 時間的要素としての2つの「とりあえず」志向

	時間的要素	意味合い	広 辞 苑	背景要因
とりあえず志向	I 時間選好性	瞬間性 (性急さ)	たちまち たちどころに	学習や生活面での 挫折経験
	II 時間順序の選択性	まったりとした持続 性(リラックス感)	さしあたって まず一応	暫定的な目標(中 間目標)に到達

出所：中畠（2009,p.31）。

II. 研究方法

人間の主観的視点と彼らが経験や出来事に与える意味に焦点を当て、事柄、行為、出来事などの意味を志向したりする研究方法は質的研究の中でも大きな比重を占めると言われる（フリック2002）。本研究の第一の目的は教育現場における無意識・潜在意識の喚起の可能性を探ることである。分析には、KH Coderによるグループ編成のテキストマイニング手法を採用した⁵⁾。具体的には、「とりあえず」に関する自由記述（＝「とりあえず」志向に関する主観的記録）を意味内容の近いもので分類していく方法をとった。なお、方法論として、量的研究では捉えきれない対象の一部分を照射する限定的研究であるため、現象面に着目することとし、霊魂や精神論には一切立ち入らない。

III. 分析対象

本研究で用いるデータの対象は、2009～2012年度にかけて筆者が担当した『キャリアデザイン』（大学1年次必修科目）等を履修した学生170名である。授業内で提出課題として受講生に課した『とりあえず作文』（＝「とりあえず」志向についての自由作文）、および、他教員が担当する『ジャーナリズム論』の受講生（女子大生）による『とりあえず作文』である。学生の内訳は、2012年度生66名、2011年度生90名、2009年度生（女子大生）14名である⁶⁾。なお、

レポート作成時に、「とりあえず」に関する先入観を与えず、主観的に書いてもらうためにも、事前説明は最小限にとどめた。また、レポート課題回収時には研究の趣旨と内容について口頭で説明を行い倫理的配慮にも努めた。

3. 分析結果：学生の「とりあえず作文」にみるケーススタディー

1. 自由記述回答のテキスト分析

まず、計量的な分析を行う前に記述統計量を確認する。全サンプル170のうち、「とりあえず」志向に対するイメージを確認したところ、賛成44、反対56、賛否両論（以下、両方）70という結果であり、個々人の捉え方が一様でないことがうかがえた。

以下、テキストマイニング手法を用いた研究手順及び分析結果を概観する。まず、自由記述回答データをテキスト形式に整理したうえでKH Coderに登録した（樋口2012）。総抽出語数は30,628、異なり語数（使用）は2,422（2,014）、出現語数の平均は5.46、出現語数の標準偏差は30.51である。表2の「抽出語リスト」では、頻出語句の上位30語にすぎないものの、学生の間では、とりあえずという用語が「便利」であるが故に、あまり意識せずに「イメージ」「志向」「行動」「考え」として日常的に使用されていること、ならびに、「大学」での「勉強」「目標」について、「将来」の「就職」「仕事」「生活」についての言及が多かったことが示された。その他、本課題レポートを通じて、普段、無意識的に使用している「とりあえず」について深く考えることで、自分自身を回顧する契機になったであろう「今」「自分」「自身」等のキーワードが見られたことも特徴のひとつといえよう。

次いで、自己を顧みる契機になった要因を詳解すべく、階層的クラスター分析を行った（図4）。見出された6つのクラスターのそれぞれに含まれるキーワードから各クラスターの特徴を表す名称を付与した。第1クラスターは〔1 資格〕〔3 生活〕〔4 頑張る〕等のキーワードより＜学生生活の活発化＞とした。次に、〔5 将来〕〔6 目標〕〔7 勉強〕から第2クラスターを＜意欲の向上＞とし、

第3クラスターは〔9 就職〕〔10 仕事〕〔11 大学〕〔12 入る〕から<ライフイベント>とした。第4クラスターは〔13 言葉〕〔14 使う〕〔19 多い〕等のキーワードより<言葉の使いやすさ>とし、〔21 志向〕〔22 良い〕〔24 考え〕〔25 行動〕から<行動のしやすさ>を第5番目のクラスターとした。最後の6つ目のクラスターは<汎用性の広さ>と命名した。

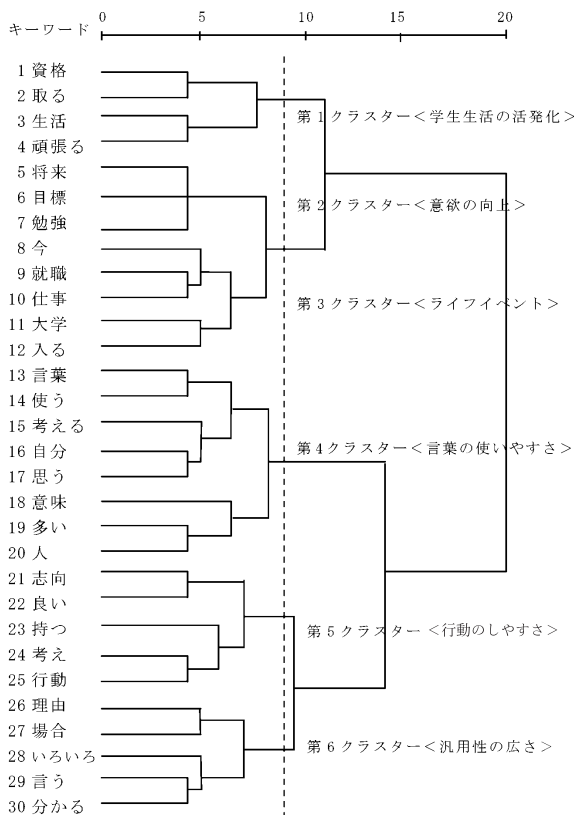
とりわけ、第4クラスターと第6クラスターより、「とりあえず」という言葉の自由度の高さ（使い勝手の良さ）が身近な使用として受け入れやすく、自分のこととして捉える機会に繋がったと推測できる。本サンプルの圧倒的多数が頻回な使用を認めていることから、若者の日常生活の中に無意識のうちに浸透していることが考えられる。また、第5クラスターによる実行や行動の起点になりやすい側面が第1・第2クラスターのような積極性に結び付くという関係性も否定できない。さらに、第3クラスターにみられる「とりあえず志向」とライフイベント（進学・就職・結婚等）の関係性については、大変興味深い論点であるが、既述の中嶋（2013）では、「公務員＝安定」に基づく時間的順序を選択する意味合いでの「とりあえず志向」が将来ビジョンの思い描きに有意な影響を与えることを確認している（表1参照）。

表2 頻出語リスト（頻出30語）

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
とりあえず	862	言う	72	イメージ	31
する	653	多い	58	物事	31
思う	411	大学	57	自身	31
言葉	321	今	55	目標	29
自分	213	行動	54	生活	29
使う	206	就職	51	便利	28
考える	114	仕事	48	友達	24
良い	99	行く	48	勉強	24
意味	89	考え	39	将来	23
志向	81	ビール	38	好き	23

出所：筆者作成による。

図4 クラスター分析によるキーワードの分類



注：抽出出現回数は15回である。

出所：筆者作成による。

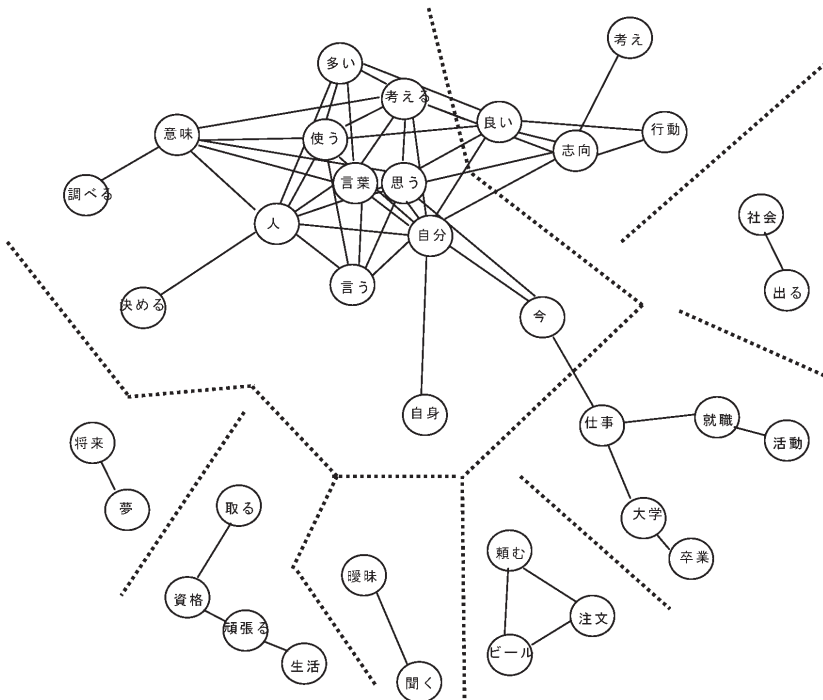
2. 自由記述回答に多く出現した主題

次に、自由記述回答の中でどの語とどの語が一緒に使われていたのかという共起に注目し、データ内にどのような主題が多く出現していたのかを探った。図5はKHの共起ネットワーク分析を用いて、語と語の共起関係を線で結んだネットワークを図5に示している。共起関係の絞り込みは描画数60に設定したため、最も強い共起関係から順に60辺が描かれている。

図5より、8つのグループに分類された。まず、右下部分をみると、学校か

ら職業への移行（transition from school to work）を表す「仕事」「就職」「活動」「大学」「卒業」という語が集中している。また、その上部に位置する「社会」「出る」とは直接的な結びつきがなく、加えて、左側に位置する「将来」「夢」とも結びつきが認められない点は、キャリア教育支援の本筋に関わる問題を暗示する結果といえよう。ただし、分析対象の年次を上げると結果が異なる可能性は十分に考えられる。つぎに、左下部分では、「資格」「取る」「頑張る」「生活」が集中しており、大学生活の中における資格取得が学生時代に頑張ったことの指標になるとの認識が学生間で強いと推察される。また、中央部分には、「自分」「今」「自身」「思う」の語が関連しており、今回の課題（「とりあえず」

図5 「とりあえず」志向に関する共起ネットワーク



注1：抽出出現回数は10回、描画数は60である。

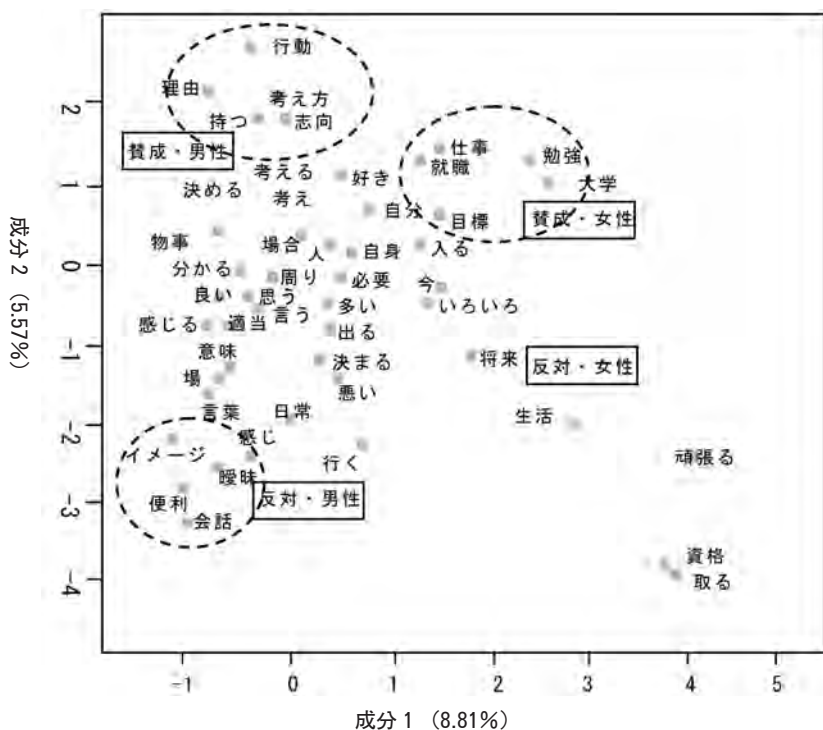
注2：グループ分けを点線で示した。

出所：筆者作成による。

作文)を通じて、自分自身を見つめ直す契機になった者が多かったことも明らかになった。本稿の問題意識に照らし合わせると、最も興味深いのは右上部分である。すなわち、「良い」「志向」「考え」「行動」が密接に関連しており、とりあえず志向を「良い」考え方と捉えられる者ほど、行動に移す（移せている）可能性が高いと捉えられる。

ここでは、潜在意識としての「とりあえず」に対する賛否の姿勢が行動への起点やきっかけになっている可能性が高いと予測されたことから、次節で、賛否の観点から、より詳細に分析していくことで、実態へのアプローチを試みる。

図6 「とりあえず」志向への賛否と自由回答の変化



注：点線は筆者がハイライトしたものである。
出所：筆者作成による。

3. 潜在意識と行動の関係性

図6において、「とりあえず志向」に対する賛否やイメージ（潜在意識）の違いによって、自由記述項目に記入された理由がいかに異なっているかを対応分析を用いて調べた。布置図より、長方形で囲んである外部変数の布置から、成分1（x軸）に性別があらわれ、成分2（y軸）に賛否の違いが示された。各成分の寄与率からは、賛否よりも性別の回答内容の違いの方が顕著であった。成分2（y軸）をみると、「とりあえず」志向に対する賛否によるプロットの位置が男性において上下に大きく離れている。すなわち、男性においては賛否による理由の違いが比較的大きかったのに対して、女性では男性ほど賛否による理由の違いが見られなかったことを意味している。では、男性において、賛否によりどのような理由の違いがあったのだろうか。まず、賛成男性の特徴的な語としては、「行動」「志向」「考え方」があり、行動に移すための潜在意識を認識する過程として積極的に捉える姿勢を読み取ることができる。それに対し、反対男性については、「イメージ」「なんとなく」「便利」「簡単」「適当」「会話」という日常場面における曖昧かつ無意識な使用として特徴づけることができる。実際の回答においても、「どんな時でも通用する万能の言葉」「どんな言葉にも付けられる魔法の言葉」「ついつい自然にってしまう言葉」「凄く便利な言葉」「コミュニケーションをとる上で不可欠な言葉」としながらも、「投げやり」「その場のしぎ」「安易な判断」「優柔不断」「後回し」「曖昧」「妥協」「あまり使わないように気を付けたい」等のネガティブな意見を持つ男性が散見された。

一方、女性では、賛成の場合は「大学」「勉強」「目標」、反対の場合には「生活」「将来」「頑張る」という特徴がみられ、総じて前向きな姿勢が汲み取れた。実際の回答においても、「私は、この“取り敢えず”こそ、頻繁に使用している人はとても人生を有意義に過ごせているのではないかと思う」、「とりあえずを上手く使えば物事を効率的に行えると思う」、「大学生活で学んだことは、とりあえず行動を起こさないと何も始まらないということ」という意見もあり、ほ

とんどの女性（女子学生）は「とりあえず志向」を賛成と反対の両面から捉えていることが上記の結果に反映されたものと考えられる。

いずれにせよ、賛成・反対・両方のいずれの立場であっても、“とりあえずやってみることの大切さ”、および、“とりあえずやってみた後の対処の方がむしろ重要であること”を示唆する結果といえる。無意識的な潜在意識が実際の行動とどの程度関連しているかが鍵になっていることが分かる。実際、「とりあえず志向」をプラスイメージで捉える者の間では、行動を起こす前の起点として前向き捉える回答が圧倒的に多いことが確認できた。具体的には、「何か行動を起こすための意思表示」「何かに挑戦するためのきっかけ」「目標・目的を達成するためのクッションのようなもの」「思い立った時にすぐ実行できる」「気持ち的に楽に行動できる」「無意識のうちに今の自分にとって一番簡単にできることに仕向ける」「マイナスのとりあえず志向をプラスの志向にかえることができればもっと行動力のある人間になれると思う」等であった。

4. まとめ

以上、就職困難かつ先行き不透明な時代の中で自己の進路を自ら選択することを迫られる若者（大学生）の心理に焦点を当て、彼らの抱く潜在意識と行動パターンの関係性を「とりあえず志向」という独自の観点から論じてきた。前半では、心理学・時間学の見地からの先行研究分析を行い、後半では、「とりあえず作文」という自由記述データを使用した計量テキスト分析を行った。

結果として、多義的な意味合いを持つ「とりあえず」という言葉を多くの日本の若者は無意識に多用しており、各々の感覚でさまざまな生活場面で縦横無尽に使用していること、男性よりも女性の方が柔軟かつ前向きに捉える傾向があること、さらに、「とりあえず志向」に対する賛否の姿勢が行動への起点やきっかけの差となって表れる可能性が高いことが明かされた（図5・図6参照）。

新しい知見としては、若者の間で日常的かつ無意識的に使用される「とりあえず」は単なる口癖やつなぎ言葉にとどまらず、普段から何気なく保有してい

る志向性として、キャリア形成上の重要な行動指針になっていることが実証された（図4参照）。「とりあえず志向がないと生きていけない」「とりあえずの生き方は生まれてから死ぬまでを表していると思う」「いつも自分の人生はとりあえずで溢れている」という回答はそのことを端的に表す発言であった。さらに、「前進するためにとっても大事な考え方」「何事も、まずやってみることで本当にやりたいことが見つかると思う」「就職活動の第一歩」という回答からは、時間順序を選択する考え方を重視する姿勢も確認できた（表1のⅡ参照）⁷⁾。ただし、同一の時間順序の選択的な「とりあえず志向」の中でも、“今現時点でできる最低限のことをする”と“今現時点でできる最大限のことをする”とに認識の差がみられることも判明した。つまり、前者は、重要な目的が先にあったうえで暫定的な立場をとることであり、後者はいろいろな選択肢の中から（今できる）最優先事項をやることになり、前者の方が後者よりも将来に向かって発展性が見込める（＝変化・追加の可能性が大きい）と解釈できる。しかしながら、サンプルの制約上および分析手法の精密さの点で、今回はその詳細までは踏み込めなかった。少なくとも、本稿の結果からは、「行動してからようやく物事を理解していく」という体験型の学びが人生を切り拓くヒントとして導かれると同時に、潜在意識の活用によって自己のキャリア形成やその質的向上をも図り得る可能性がうかがえた⁸⁾。

本研究は無意識かつ潜在意識の一断面として、「とりあえず」志向に着目した限定的研究であったため、曖昧かつ不安定な意識要因の内在化がキャリアにつながる可能性について若干の検討を加えたに過ぎない。また、テキストマイニング手法により質的データの計量的分析は行えたものの、自動抽出した語による分析では、分析アプローチの精緻化、および、解釈の妥当性の確認についても必ずしも十分とは言えない。今後は、サンプル対象を広げるとともに、テスト・バッテリー（他の計量ソフトウェアの併用）により検証を積み重ねていく必要がある。

<付記>

本稿を作成するにあたり、東洋英和女学院大学の町田幸彦教授にご教示とご協力をいただいた。ここに記して感謝を申し上げます。

<参考文献>

- 入不二基義（2000）「時間とは何か、何でありうるか」『山口大学哲学研究』第9巻、pp.2－15.
- 入不二基義（2002）『時間は実在するか』株式会社講談社.
- ウヴェ・フリック（2002）『質的研究入門＜人間の科学＞のための方法論』春秋社.
- キャリア・コンサルティング協議会（2013）『大学におけるキャリア教育実践講習テキスト』厚生労働省委託事業平成24年度キャリア教育専門人材養成事業.
- 河井亨・溝上慎一（2011）「実践コミュニティに足場を置いたラーニング・ブリッジングー実践コミュニティと授業を架橋する学生の学習研究」『大学教育学会誌』第33巻第2号、pp.124－131.
- 川口潤（2003）「認知心理学と意識」『PSIKO』第4巻第4号、pp.20－25.
- 齋藤孝（2007）『「潜在力開発」71のメソッド』株式会社 講談社.
- 坂上肇（1992）『やりたい！できる！やりとげる！！潜在能力を活かす33の鉄則』サンマーク出版.
- 知的財産情報検索委員会第1小委員会（2012）「テキストマイニング手法の有用性の検討」『知財管理』第62巻第8号、pp.1155－1166.
- 中畠剛（2009）「進路選択における『とりあえず』志向の発生因——若手公務員への聞き取り調査結果を手がかりに」『神戸国際大学紀要』第76号、pp.25－41.
- 中畠剛（2013）「とりあえず志向と初期キャリア形成—地方公務員への入職行動の分析」『日本労働研究雑誌』第632号、pp.87－101.
- 長塚美恵（2000）「副詞『とりあえず』について」『外国語学会誌（大東文化大学）』第29号、pp.91－102.
- 日本経済新聞社（2012）「日本経済新聞」2012年11月28日号朝刊3面.
- 日本経済新聞社（2013）「日本経済新聞」2013年3月16日号朝刊4面.

- 樋口耕一 (2004)「テキスト型データの計量的分析」『理論と方法』第19巻第1号、pp.101-115.
- 樋口耕一 (2011)「現代における全国紙の内容分析の有効性—社会意識の探索はどこまで可能か」『行動計量学』第38巻第1号、pp.1-12.
- 樋口耕一 (2012)「質問紙調査における自由回答の分析」『社会と調査』第8号 pp.92-96.
- マクスウェル・マルツ ダン・S・ケネディ 編 田中考顕訳 (2012)『潜在意識が答えを知っている!』きこ書房.
- 増井透 (2003)「意識の背後にある無意識の働き」『PSIKO』第4巻第4号、pp.26-33.
- 水原幸夫・松見法男 (1994)「潜在的学習研究の現状—無意識的な学習過程」『広島大学教育学部紀要』第1部 (心理学)、第43号、pp.77-83.
- 溝上慎一 (2012)「学習の学びと成長」京都大学高等教育研究開発推進センター (編)『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版、pp.119-145.
- ガーディナー・モース (2006)「脳の意思決定メカニズム」『Harvard Business Review』第31巻第4号 (通巻211号) pp.60-70.
- 山田恭子 (2005)「記憶の環境的文脈依存効果に及ぼす想起意識と項目手がかりの影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部、第54号、pp.339-346.
- 山田昌弘 (2004)『希望格差社会』株式会社筑摩書房.
- Maxwell Maltz, (1969) *Psycho-Cybernetics*. Prentice-Hall, Inc.

注)

- ¹⁾ 大学 (学部) の約88%で、職業意識・能力の育成を目的としたキャリア教育が実施されている状況にある (キャリア・コンサルティング協議会2012)。
- ²⁾ 意識に上らないレベルでの広範な情報処理の扱いについては諸説がある。例えば、意識されない情報は完全に却下されたのではなく、単に弱められただけにすぎないとする見解や主体にとって強い意味を持つものだけが意識に上がるという見解もある。
- ³⁾ 時間副詞の「とりあえず・たちまち」は、現代的用法では「持続性・リラックス感 (= 時間順序の選択性)」の意味が含まれ、変化や追加の可能性を将来に残すという点で、物事や動作の起点になり得ると考えられる (中嶋2009; 2013)

- ⁴⁾ さらに、長塚（2000）は、「とりあえず」「いちおう」以外に第3番目の類義語として、「今現時点で言えることは（at the present for now）」のニュアンスを含む新しいトリアエズを指摘する。
- ⁵⁾ 本分析で使用するKH Coderでは、テキストが品詞分解され、重要関連キーワードの中で出現回数の多いものを優先度の高い順に自動抽出していくため恣意的になりにくい反面、分析結果に問題関心と関係ない語や無意味な語まで含まれてしまい頑強性の点で盤石とは言えない（樋口2004、知的財産情報検索委員会第1小委員会2012）。
- ⁶⁾ 実施日時は、順に2012年5月、2011年6月、2010年10月であり、原稿用紙1枚を配布し、400～600字程度で自由に記述させた。
- ⁷⁾ こうした行動ありきの考え方に類似するものとして、坂上（1992）では、意欲を強化するための方法に、働きながら生きがい感を引き出す「目的自覚法」を唱えている。
- ⁸⁾ 人間が本来兼ね備えている潜在意識の積極的活用による作業効率化や能力発揮の極意を示した研究も幾つか存在する。例えば、Maxwell（1969）、坂上（1992）、齋藤（2007）、マクスウェル（2012）等。

（なかしま つよし 本学准教授）